

令和7年度特別選抜「小論文（外国語の読解を含む）」

解答例および出題のねらい

問1 要約

人間の排泄物の処理は、古代から現代に至る人間の歴史において、普遍的な問題だった。古代ローマにおいて、人々は公衆トイレで社交をする風習をもっていた。この公衆トイレには、工学技術により、公共下水道が汚物を流す仕組みが備わっていた。こうしたトイレ技術について、その大きな革新は、1800年代の半ばにヨーロッパやアメリカの家庭に水洗トイレが設置されることで、生じる。さらにこの技術は、20世紀末の日本における電動ウォシュレット・トイレの開発にまで至る。

しかし、先進国において高い技術を備えた公衆トイレが普及していく一方で、発展途上国ではトイレや基本的衛生設備を欠く多くの人びとが存在している。先進国の米国においてすら、かつてのフロイトのエピソードにあるように、公衆トイレが貧弱な状況が現在でも存在している。

インドにおいても、とりわけ女性にとって、不十分な数のそして清潔さに欠ける公衆トイレが問題となっており、著名な映画人のシャー・ルク・カーンも、この問題解決のための活動をおこなってきた。カーンのこうした活動は、とりわけ貧しい女性や少女、社会的少数派にとっての公衆衛生と衛生についての問題意識を背景にして、行われてきたものだった。

近代看護の創始者フローレンス・ナイチンゲールは、こうした公衆衛生に関する課題として公衆トイレの改善に取り組んできた先駆者である。公衆トイレの改善は公衆衛生上の重要な課題であり、それを踏まえて国連は11月9日を世界トイレの日と定めている。

問2 出題のねらい

大規模な観光客らを迎える大都市においては、公衆トイレを有料化する動向が見られている。この動向は、不特定多数の人々の利用する公衆トイレについて、その清潔性と安全性を、利用者の負担を通じて維持しようとする考えのもとに、広がりつつある。

しかし、こうした有料化の動向は、「誰でもが使用できる」という公共性を公衆トイレから徐々にではあれ失わせていくことにもなる。

有料公衆トイレの浸透がもつこうした多様で対立しうる背景と含意について、どれだけ理解を示せているか、そしてそのうえで根拠にもとづいた主張を展開できているかについて、それぞれ評価する。